

## 生産と流通

田中克子  
福岡市教育委員会

TANAKA Katsuko  
Board of Education FUKUOKA City

### はじめに

消費地出土の貿易陶磁器は当時の社会事情を明らかにする重要な鍵である。その陶磁器がもたらされた背景にはさまざまな要因があるからである。これは、生産地側と消費地側との情報交換・相互理解によって初めて解明されることであり、本共同研究の目指す所でもある。

本項では前に報告された消費遺跡や海底遺跡での出土状況に基づき、生産地においては把握困難な製品の年代的位置付けやその流通について概観し、本章のまとめとしたい。なお、東南アジアを含めた交易ネットワークの中での流通については次章の森本に譲り、本論では日本国内での流通の状況を基に、当時の日本及び琉球と中国との交易関係について予察する。

### 1. 生産地

まず、それぞれの生産地について再度まとめる。今帰仁タイプについては、現時点で判明した最も近い製品を生産しているのは浦口窯である。各地点により製品や時期の違いが若干見られ、最も類似した製品が多く確認できたのは上元山であるが、踏査地点はそれぞれ近接しており、あくまでも採集資料による分析のため確定はできない。大きく浦口窯という範囲で捉えたい。ピロースクタイプについては、その特徴である肉厚で重量感のある製品は、閩江流域一帯でかなり広範囲に生産されているが、この中でも特に琉球諸島一帯を中心として出土するものはほぼ閩清義窯・青窯の製品であることは明白である。また、出土例は少ないが円盤状高台を有する製品は南平茶洋窯の製品である可能性が高い。

### 2. 形態変化と消長 (図1・2)

今帰仁・ピロースクタイプは生産地においてどのように位置付けられるのであろうか。それぞれの形態変化や生産の消長について、前に金武が示した編年を基に、他の消費地遺跡等での出土状況を補足して考察する。

今帰仁タイプは今帰仁城跡で13世紀後半に初めて出現すること、さらに1281年の弘安の役で元船が沈没した鷹島海底遺跡では極少量認められるものの、大半は浦口窯の同安・竜泉の影響を受けたと思われる製品であることから、その生産開始時期は概ね南宋末～元初（13世紀後半）と考えてよいだろう。また、博多遺跡群では今帰仁タイプに類する資料に内底を輪状釉剥ぎするものが多く、これらの年代が早いこと、さらに今帰仁城跡で最初に出現したものは輪状釉剥ぎするものであることから、この方法が露胎にする方法より早くに始まった可能性がある。生産のピークは元初～中期（13世紀末～14世紀前半）であり、今帰仁城跡においてもこの時期出土するものはほとんど内底を露胎とする製品である。つまり、浦口窯では南宋前期（12世紀後半代）に盛んに採用された輪状釉剥ぎによる重ね焼きの方法を踏襲しながら、次第に今帰仁タイプへと続く製品が作られるようになり、13世紀後半位に今帰仁タイプの形態が出現、同時に内底を露胎にする方法も採用され始め、この後14世紀前半にかけてこの方法が主流になったと考える。施釉後再度釉剥ぎするという途中の手間を省き、一度の浸し掛

けによって内底を露胎のまま残して重ね焼きするという方法を採用することにより、より大量の生産を目指したのではないだろうか。しかし、その生産時期は比較的短く、元後半（14世紀中）には今帰仁タイプの生産は停止したと思われる。このタイプに代わって別の製品が出現したのか、或いは窯自体の操業が停止したのか<sup>(1)</sup>、この窯における他の焼造製品の詳細な検討が必要であろう。

ピロースクタイプについては、Ⅰ類・Ⅱ類は今帰仁タイプの出土量が最も増加する13世紀末～14世紀初頭に今帰仁タイプと共に琉球諸島にもたらされ始め、さらに14世紀前半～中頃には、姿を消し始める今帰仁タイプに取って代わってそのピークを迎える。これは金武も既に述べているように、新安沖沈船から両者共に出土していることや、博多遺跡群においてもⅡ類が14世紀前半には出現していることから裏付けられる。以上より生産開始時期は概ね元代初頭～前半（13世紀末～14世紀初頭）と考えて間違いのないであろう。ただし、Ⅰ類については、閩清窯でこれに先行すると思われる製品が確認され、この製品が形態的に12世紀後半～13世紀初め頃の白磁（田中分類D類、田中2003、7頁）の系統を引くものと考えられることから、Ⅱ類に先行して南宋末～元初（13世紀後半）位には生産が開始されていた可能性が高い<sup>(2)</sup>。この中にはピロースク遺跡等で出土したような内底を輪状釉剥ぎするものも含まれる。この後元後半（14世紀中頃）までに内湾口縁のⅡ類が生産のピークを迎え、同時に外反口縁のⅢ類へと形態を変化させ始める。Ⅲ類は言うまでもなく、琉球諸島においては14世紀後半～15世紀前半にかけて普遍的に出土する製品で、明代前半にかけて大量に生産されたものである。

### 3. 流通

まず、博多遺跡群における出土状況から、今帰仁タイプ・ピロースクタイプ両生産地の製品が日本へ輸出され始める宋代に遡って、その流れを追ってみる。

11世紀後半～12世紀前半、博多では膨大な量の福建産白磁（田中分類A・C類他、田中2003、3～5頁）が出土する。そのほとんどが閩清窯の製品ではあるが、浦口窯や南平茶洋窯においても極めて類似した製品が焼かれており、これらもまた含まれていると思われる。続く12世紀中～後半には、内底を輪状に釉剥ぎして重ね焼きをする焼成方法を採用した製品（田中分類F類、田中2003、8頁）が出土するようになる。これもまた閩清窯・浦口窯を含めた閩江中下流域から沿海部にかけて広く生産されたものである。その後12世紀後半～13世紀代にかけては、同安・竜泉窯系の青磁が主流となるが、両窯の製品<sup>(3)</sup>も依然として輸入されている。

このような状況に変化がみられるようになるのが13世紀後半になってからである。当時の貿易都市であった博多遺跡群出土の数万点を越える貿易陶磁器の中において、多少の報告漏れがあったことを考慮しても、今帰仁タイプ・ピロースクタイプの出土量は琉球諸島でのそれにとり及ぶものでない。11世紀後半から博多に大量に輸入されていた、しかも引き続き操業は続けている閩清・浦口両窯の製品が、13世紀後半を境に博多にはほぼ入って来ないという現象をどのように理解すればいいのか。例えば、この時期出土する白磁の主流は「口禿」（中国では“芒口”と表現）と呼んでいる、伏焼焼成のために口縁の釉を搔き取ったものである（田中分類H・I類 田中2003、9～10頁）が、竜泉窯系青磁と共に日本国内に広く流通した製品である（田中2008、119～120頁）。これらは福建省閩北沿海部、或いは閩南沿海部の製品と考えられるものもあり、決して福建産白磁が別の生産地の製品にとって代われ、輸入されなくなったというわけではない。また、「口禿」白磁が上物であるかと言えば、今帰仁タイプと同様大量生産によるどちらかと言えば下手の部類に入るもので、品質的に今帰仁・ピロースクタイプとそれ程変わる物ではない。さらに、第3章第2節3でも述べたように、円盤状高台を持つピロースクタイプの生産地である南平茶洋窯で、同時期に生産されていた天目碗はかな

りの量が輸入されている。つまり、同時期に輸入された製品と同じ生産地域の中にあっても、両製品は需要がなかったがために、日本（博多）向け輸出品目からふるい落とされたと考えるのが妥当であるのか。しかし、そうすると問題になるのが、博多向けの交易船である新安沖沈船から出土したビロースタイルI・II類である（文化財庁・国立海洋遺物展示館2006、31・32・88頁）。これを乗組員の携行品と捉えるのか、或いは単純に、商品として運ばれてはきたが、需要のない商品であったがために博多など日本国内には残らず、必要とされた琉球へもたらされたと捉えるのか、現段階において言及することは困難である。

このことと関連して、奄美諸島における出土状況は何らかの示唆を与えてくれる。宮城・新里も指摘したように、琉球諸島（沖縄・先島諸島）と奄美諸島ではその内容に明らかな相違が見て取れる。奄美諸島では今帰仁タイプは見られず、ビロースタイルについてはI・II類は出土しているものの極少量であり、III類の段階になってその数を増している。しかし、これも沖縄諸島での出土量とは比較にならない少なさで、どちらかと言えば博多遺跡群での状況と似ている。第3章第3節2の冒頭でも述べたように、当時の貿易港であった博多に荷揚げされた交易品は、その後さらに各地へと運ばれる。琉球列島も例外ではない<sup>(4)</sup>。九州と琉球列島とを結ぶ担い手については、木下や鈴木等が指摘するようにさまざまな考え方があり<sup>(5)</sup>、いずれにしても、琉球列島で出土する貿易陶磁器は、九州と琉球列島を取り巻く流通圏の中でもたらされたというのが一般的である。実際、琉球列島での貿易陶磁の出土状況を見ると、13世紀後半に今帰仁タイプ・ビロースタイルが出現するまでは、数量等の違いこそあれ、その内容は荷揚げ港であった博多や権力の集中していた鎌倉・京都等一部の都市部周辺地域の状況と変わるものではない。さらに、13世紀後半以降朝貢貿易が開始されるまでの貿易陶磁器の出土状況についても、今帰仁・ビロースタイルを除けば、日本本土での内容と大差がない<sup>(6)</sup>。つまり琉球列島は、朝貢貿易が開始されるまでも依然として、日本国内の他地域と同じように博多を中心とした大きな国内流通圏の中に取り込まれていたと考える。

この流通圏の中にあって、この二種製品のみが博多から沖縄諸島の間には全くといっていい程持ち込まれていないのは、単に需要の問題として捉えるよりむしろ、今帰仁タイプ・ビロースタイルI・II類が、博多から琉球に至る流通ルートの中に最初から含まれていなかったと考えるほうが妥当ではないだろうか。ビロースタイルIII類については、沖縄諸島において14世紀後半～15世紀前半に急増することや、遠くは十三湊遺跡を始めとした日本本土各地へ分布を拡大している状況は<sup>(7)</sup>、まさに明との朝貢貿易による結果と捉えることができ、奄美諸島出土のIII類も琉球から北上して本土にいたる流通の過程によるものであろう。すなわち、13世紀後半を境に、それまで形成されていた九州と琉球列島を繋ぐ大きな国内流通圏とは別に、沖縄諸島から先島諸島にかけて、琉球諸島を巡る流通圏が形成され、今帰仁タイプ・ビロースタイルは、この中で消費された製品と考える。これについては、陶磁器のみならず他の考古資料等を含めて比較・検討をする必要がある<sup>(8)</sup>。

最後に、今帰仁タイプ・ビロースタイルI・II類がどのようにこの流通圏の中に運ばれて来たのかを考えてみたい。これに関して、先島諸島と沖縄諸島における出土状況の相違は重要と考える。先島諸島のほうが相対的に今帰仁タイプやビロースタイルI類の出土量が多い。中でも今帰仁タイプについては内底を輪状釉剥ぎするものが多く、ビロースタイルI類にも沖縄諸島では類例のない内底を輪状釉剥ぎするものがある。さらに、非常に不確定ではあるが、宮古島住屋遺跡出土品が閩清窯で確認されたビロースタイルI類に先行するタイプにも類似している<sup>(9)</sup>。前述したそれぞれの形態変化と年代的な位置付けを前提にすると、先島諸島出土資料には年代的に古いものが多い傾向が伺われる。逆に、ビロースタイルIII類の出土量について見ると、沖縄諸島での突出した状況を見て取

れ、宮古・八重山諸島では相対的に少ない。これは朝貢貿易により沖縄諸島に持ち込まれたものが、周辺地域へと広がっていった状況を示すものである。このように相反する状況を考えてみると、今帰仁タイプ・ビロースクタイプⅠ・Ⅱ類は、福建から八重山・宮古諸島、さらに沖縄諸島へと北上する交易ルート<sup>(40)</sup>によって運ばれてきた可能性は十分考えられる。しかし、これがとりもなおさず当時の琉球と中国との直接交易に繋がるとは言い難い。なぜならこのルートの最終目的地はあくまでも「博多」であり、両製品はその経路の途中で琉球諸島に受容されたものなのか、或いは最終目的地はこの地であったのかは、多方面からの立証を必要とするからである。

#### 注

- (1) 沖縄では、14世紀中頃、ビロースクタイプⅢ類と共に、莆田庄辺窯（第3章第2節2の図4参照）と思われる製品が出現するようになる。これは、今帰仁タイプと同様内底を輪状釉剥ぎ、或いは露胎にして、重ね焼きにより焼成された製品である。このことから、浦口窯の製品はこの頃には操業を停止し、代わって庄辺窯の製品が琉球へ輸出されるようになった可能性も十分考えられる。
- (2) 白磁Ⅰ類は大きく外に開く碗で、内面の劃花文や印花文を特徴とする。宋代景德鎮窯青白磁の影響を受けたものとする。また、ビロースクタイプⅡ類にも、高台の作り等形態的に景德鎮窯枢府白磁の影響が窺われることから、Ⅰ類の出現時期を13世紀後半頃に想定することは可能と考える。
- (3) この時期博多遺跡群で出土する両窯の製品は上記白磁Ⅰ類や、第3章第3節2で紹介した浦口窯の同安・竜泉窯系青磁の影響を受けたと思われる碗や小形の皿等（田中分類Ⅰ類-浅形、田中2003、9頁）もある。
- (4) 亀井は博多に荷揚げされた貿易陶磁器の国内流通について、「この貿易陶磁器が、わが国内に販路を求めて、博多から強い力で押し出され、それを求める側との条件が合致した時、たとえその地が今日の眼から見れば山間僻地であろうと絶海の孤島であろうと、汎日本的に波及し、陶磁器は受容されている」として、琉球列島に受容された陶磁器については、「九州本土と南西諸島を直接ないし中継して結ぶ交易船が往来する形態」によりもたらされたと指摘する（亀井1993、28～30頁）。
- (5) 木下は当時の日本と琉球との交易を「貝交易」という視点で捉えており、大和において需要の高い貝を求めて、選択された陶磁器、滑石製石鍋、鉄製品を携えた大和商人が琉球列島に積極的に進出したとする（木下2003、117～144頁）。また、九州産石鍋の分布に着目した鈴木は、琉球列島への流通の担い手を国内商人でなく宋商人と推測している（鈴木2007、96～108頁）。
- (6) 最近の琉球列島における発掘調査成果にはめざましいものがあり、出土した貿易陶磁器の内容もかなり詳細に分かってきている。以前感じられていた年代観のずれも博多におけるそれとほとんど差がなくなっており（金武1998・瀬戸他2007）、博多に貿易陶磁が大量に輸入され始める時期から、琉球列島にも同様にこれらがもちこまれていることがわかる。さらに、筆者は13世紀中頃～14世紀後半の琉球列島と博多遺跡群、及び周辺地域出土陶磁器について比較検討を試みたが、出土量を除けば、顕著な相違を見出すことができなかった。当然、博多で出土しており、琉球列島で出土していない種類はあるが、これは琉球列島に限ったことではない。その時代の主流となっている陶磁器については、種類や形態等、博多周辺地域出土品とも大きな違いはない。
- (7) 他に、熊本県玉名市永徳寺（亀井1981、6頁）等九州各地はもとより、瀬戸内海沿岸の尾道遺跡・草戸千軒町遺跡（森田1982、50頁）や、北東日本海沿岸地域では新潟県堀越館跡・至徳寺遺跡の15世紀前半代の遺構から出土している（水澤2004、200～202頁）。
- (8) その一例として、徳之島で焼かれたカムイヤキの分布が挙げられる。カムイヤキの13世紀後半以降の分布域が、この琉球諸島を取り巻く流通圏に重なっている状況（新里2003、398～400頁）は興味ある現象である。
- (9) 金武は、この資料について形態的にビロースクタイプに通じるところもあるが、今回対象の今帰仁タイプ、ビ

ロースタイプいずれとも判断しかねる資料とする（第3章第3節1）。

- (10) 当時の中国と日本との交易ルートについては、奄美大島倉木崎海底遺跡の発見（宇検村教委1999）によって、唐代以降の主要ルートであった明州（寧波）—博多の他に、宋代には琉球弧を北上するルートが存在した可能性も指摘されている。金沢は、海流や季節風の条件と琉球列島での貿易陶磁器の出土状況等から、当時の交易航路について論じている（金沢2002）。その中で、福建を出発し、途中琉球列島で小規模な交易を行いながら、最終目的地博多を目指して北上するルートを想定する。また、榎本も朝貢貿易開始直前には、14世紀初頭に始まった明州一帯での内乱等が航路に影響し、これまでサブルートであった福建—琉球—博多ルートがメインとして躍り出て、その後琉球と明との朝貢貿易のルートとして使用されるようになったとする（榎本2008、80～81頁）。

## 文献

- 宇検村教育委員会 1999 『鹿児島県大島郡宇検村 倉木崎海底遺跡発掘調査報告書』宇検村文化財報告書第2集
- 榎本 渉 2008 「日宋・日元貿易」『中世都市・博多を掘る』pp. 80～81、海鳥社
- 金沢 陽 2002 「アジアの海—沈没船が語る中世交流史—」第37回歴博フォーラム資料、国立歴史民俗博物館
- 亀井 明德 1981 「14・15世紀の貿易陶磁—とくに日本出土の中国陶磁—」『貿易陶磁研究』No. 1、p. 6、日本貿易陶磁研究会
- 1993 「南西諸島における貿易陶磁器の流通経路」『上智アジア学』第11号、pp. 28～30、上智大学
- 木下 尚子 2003 「貝交易と国家形成—9世紀から13世紀を対象に—」『先史琉球の生業と交易—奄美・沖縄の発掘調査から—』平成11～13年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書、pp. 117～144、熊本大学
- 金武 正紀 1998 「陶磁器輸入の流れ」『陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア』那覇市教育委員会
- 鈴木 康之 2007 「滑石製石鍋のたどった道」『東アジアの古代文化』130号、pp. 96～108、大和書房
- 新里 亮人 2003 「徳之島カムイヤキ古窯産製品の流通とその特質」『先史学・考古学論究Ⅳ』考古学研究室創設30周年記念論文集、pp. 398～400、龍田考古会
- 瀬戸 哲也・仁王 浩司・玉城 靖・宮城 弘樹・安座間 充・松原 哲志 2007 「沖縄における貿易陶磁研究—14～16世紀を中心—to」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～補遺編』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
- 田中 克子 2003 「博多遺跡群出土陶磁に見る福建古陶磁—（その三）宋・元代白磁をめぐる問題」『博多研究会誌』第11号、博多研究会
- 2008 「Ⅲ 陶磁の海道—貿易陶磁器の推移」『中世都市・博多を掘る』、pp. 119～120、海鳥社
- 文化財庁・国立海洋遺物展示館2006 『新安船 The SHINAN Wreck Ⅲ』、pp. 31・32・88、国立海洋遺物展示館、韓国
- 水澤 幸一 2004 「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁器様相」『貿易陶磁研究』No.24、pp. 200～202、日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1993 「14～16世紀の白磁分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2、p. 50、日本貿易陶磁研究会

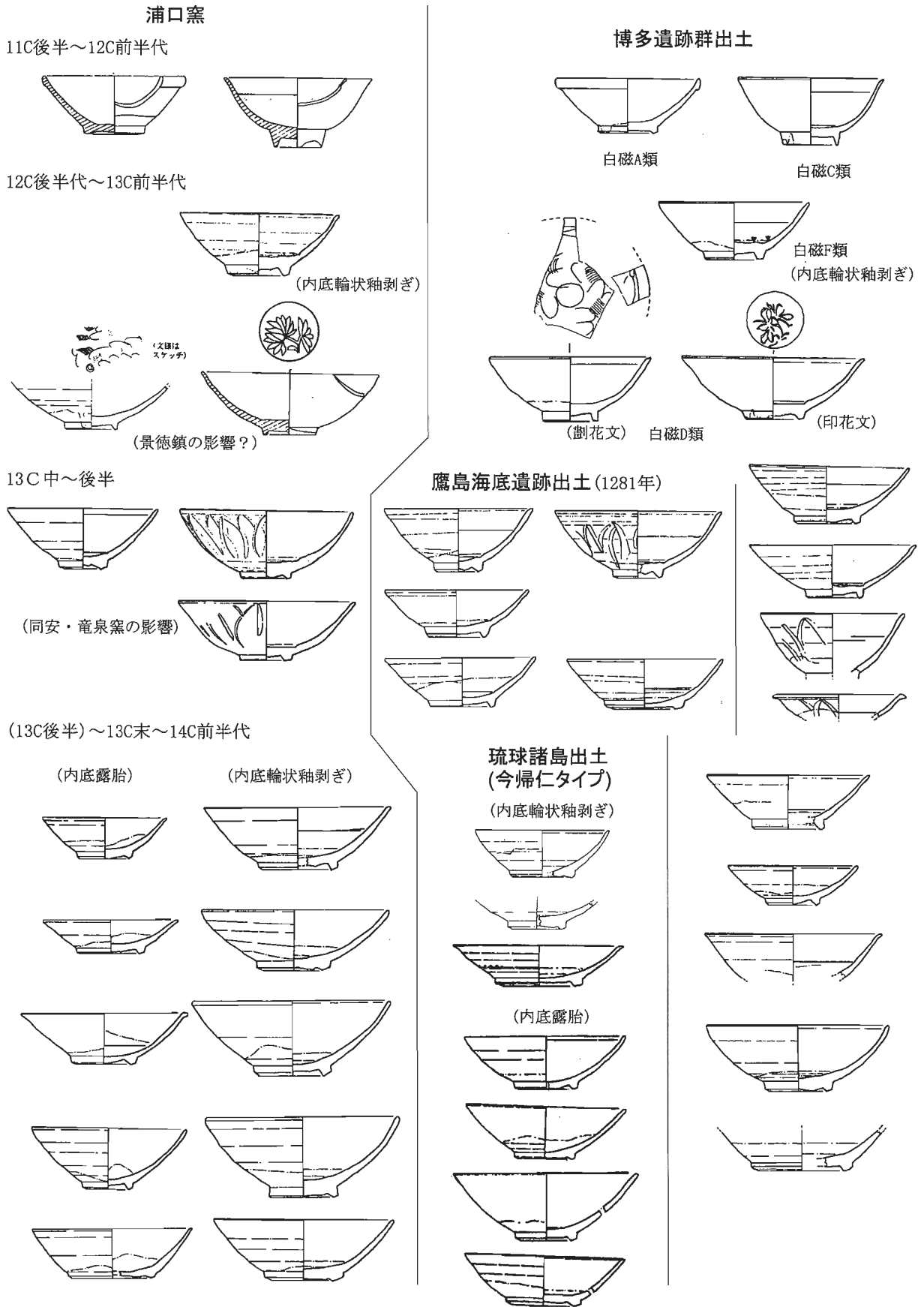


図1 浦口窯における磁器生産とその消費状況 (縮尺約1/6)

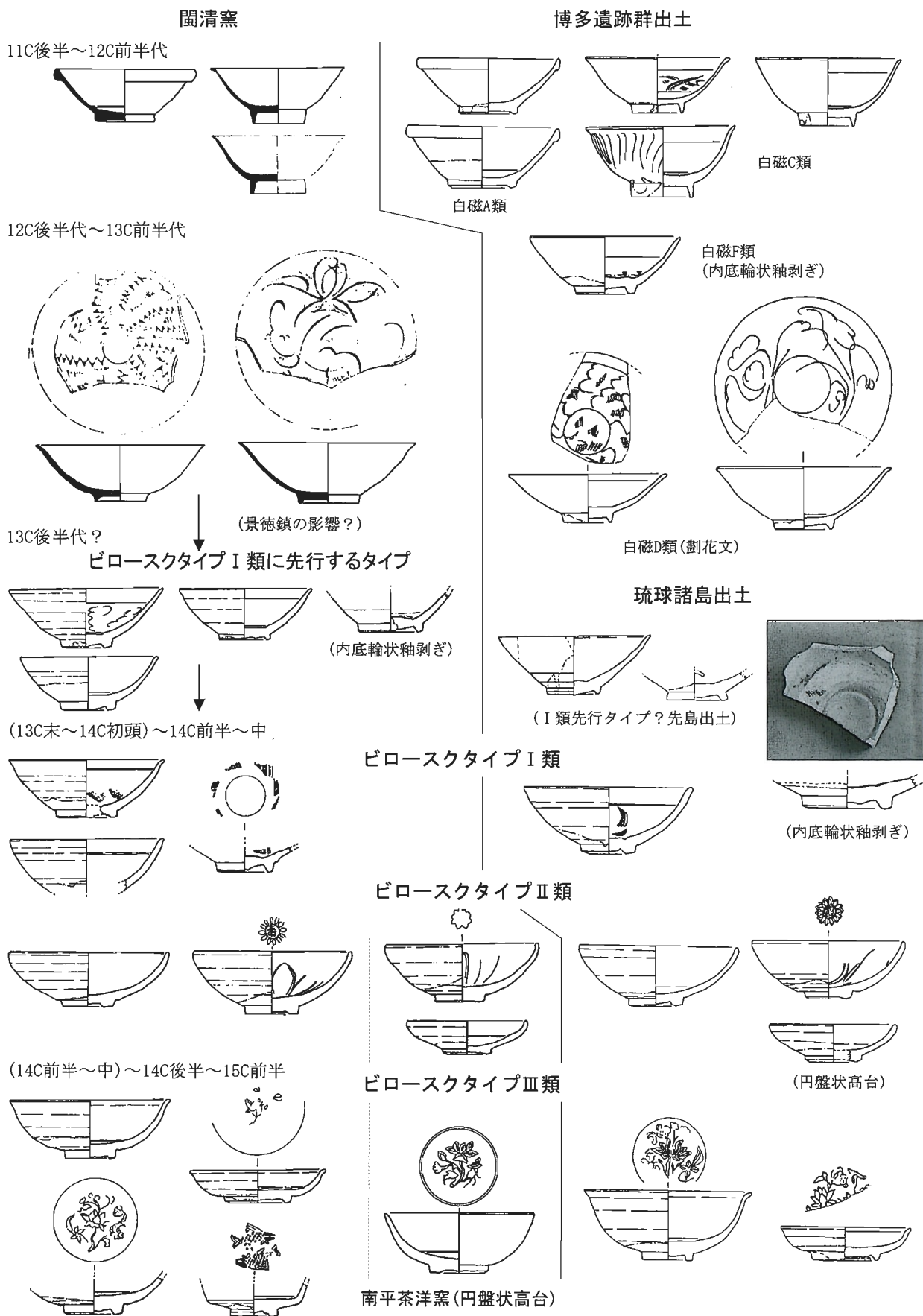


図2 閩清窯・南平茶洋窯における白磁生産とその消費状況 (縮尺約1/6)